

学習塾講師検定 審査員の声

第三者からの声は 授業力アップにつながる

——学習塾講師検定の審査でどのようなことをお感じになりますか。

●まず先に申し上げたいのは、学習塾講師検定は、講師のコンピテンシー（ディクショナリという客観的な評価基準に基づいた審査だということ）です。

●複数（3名）の審査員が共通の視点で受験者の行動を丁寧に見ています。

●授業を審査するということの難しさを毎回感じています。先入観をもたずに審査するというのは公正ではありませんが、その分実際に授業をしている方の意図をこちらが汲み取れない可能性がります。また各塾であるいは各講師が「良し」としていることが場合によっては真逆のことがありますから非常に難しく思います。

●授業に対するコメントはせいっぱい書かせてもらっているのですが、それが届けば嬉しいなというも思っています。何年もやっているがたまたま同じ方を審査することがあるのですが、以前見た時より上達されていると「審査員をやつていてよかった」と非常にやりがいを感じます。

——学習塾講師検定の活用は経営者や研修担当者にとってどんなメリットがあるとお考えになりますか。

●「第三者からの評価」、つまり外人にはどう見えるのかが分かるという点ではないでしょうか。例えば研修内容は今のままでいいのか、改善が必要なのかなど、指針の1つになると思います。

●この検定を自塾のPRに活用することや、講師の査定に活かすことも可能かと思えます。

——学習塾講師検定の活用は講師にとってどんなメリットがあるとお考えになりますか。

●人に審査されるということは自分の授業を見直す良いきっかけになるのではないのでしょうか。自分のやっていることがどう映るのか、これでもいいのか、改善が必要なのかを発見できる可能性があります。

●審査員からのコメントに納得いかなかったこともあるかと思いますが、私自身は他者からのコメントが自己の成長につながりました。それを得られるというのは授業力アップの良い機会になるのではないのでしょうか。

——これから講師スキルを向上（再確認）したいとお考えの方々にひとことお願いします。

●あくまで原則ですが、板書をずる際は、①完全に背を向けるのではなく、体を開いて書く

②無言ではなく、何か声を出しながら書く

③長くなりすぎないようにする。などが大切なことかと思えます。

●私は授業内では発問が特に大切だと感じている

のですが、授業を見ていて「発問が少ない」と感じることもあり、とても気になります。審査用の授業という特殊な状況ではありますが、「先生が一方的に説明している」という印象を受けることが多いです。

発問は①考えさせることで理解を深める、定着させる ②生徒に「分かった」という喜びと達成感をもたせる ③生徒と先生のやり取りが生まれることで活発な授業になる

などが期待できる非常に有効な手段だと思います。そのため発問の種類や方法などはいくつがりますが、ここですべてを書くのは難しいので、もし今後発問を増やしていきたいと思われる方は「聞けることは全て聞く」というところから始められるといいかと思えます。

●これは講師スキルを向上（再確認）したいとお考えの方々にひとことお願いします。

●あくまで原則ですが、板書をずる際は、①完全に背を向けるのではなく、体を開いて書く

②無言ではなく、何か声を出しながら書く

③長くなりすぎないようにする。などが大切なことかと思えます。



学習塾講師検定審査員の高橋直子先生

社名 **塾講師研修**
所在地 **千葉県船橋市前原東4-5-2**
代表者 **高橋直子**
eメール **tsudagaku55@paw.hi-ho.ne.jp**

公益社団法人全国学習塾協会学習塾講師検定主任審査員。
学習塾講師歴16年。
大学卒業後、神奈川県で学習塾に入社。その後、母親が始めた学習塾を継承した。2010年第5回全国模擬授業大会最優秀賞受賞。現在は、長年の講師経験を生かし、学習塾講師の授業研修を中心とした活動を展開中。



上：学習塾講師検定の審査をする審査員の方々
下：高橋先生の授業